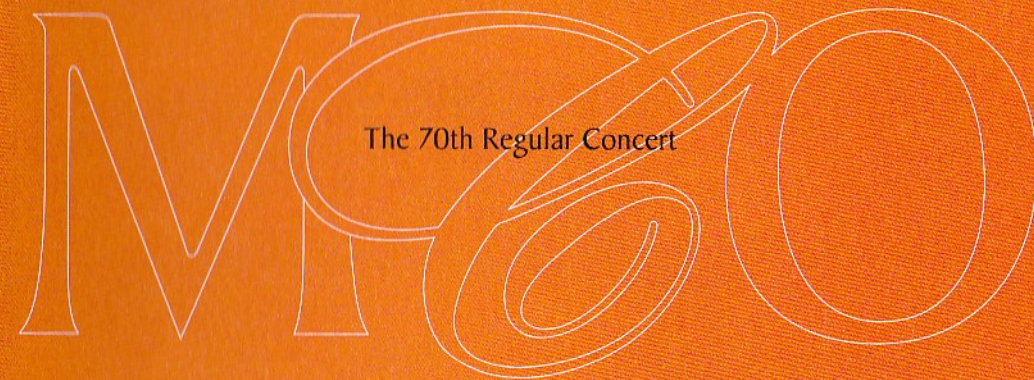




The 70th Regular Concert

水戸室内管弦楽団

第70回定期演奏会



水戸芸術館
ART TOWER MITO

CONCERT HALL ATM

つくっているのは、希望です。

私たちは、人間をこよなく愛する製薬会社です。人間といういのちの輝き、いのちのすこやかさを愛し、そのためになることなら、どんな努力も惜しまない製薬会社です。私たちは、どこよりも先進の集団でありたいと思います。すぐれた研究力と開発力をみがき、つくれなかった薬をつくり、治せなかった病を治す。そのことに限りなく貢献できる会社になろうと思います。私たちは、どこよりも誠実な集団でありたいと思います。医薬品づくりは、いのちにかかわる仕事。そのことを胸深く刻みつつ、誰からも、心から頼られるパートナーでありたいと思うのです。人間の、かけがいのない一日一日をしっかりと守ること。思いがけなく待ち受ける病に、すばやく立ち向かうこと。私たち第一三共がつくっているものは、医薬品であると同時に、すべてのいのちをまばゆく照らす「希望」だと思っています。

www.daiichisankyo.co.jp



第一三共株式会社

第一三共株式会社は、水戸室内管弦楽団の活動を支援しています。



水戸室内管弦楽団

第70回定期演奏会

Mito Chamber Orchestra

The 70th Regular Concert

第70回定期演奏会

2007年11月10日(土)18:00開場・18:30開演

11月11日(日)13:30開場・14:00開演

会場：水戸芸術館コンサートホールATM

主催：財団法人 水戸市芸術振興財団

協賛：第一三共株式会社

株式会社 ポイント

(財) げんでん ふれあい茨城財団

株式会社 吉田石油

協力：全日本空輸株式会社

後援：水戸商工会議所

お客様へのお願い

コンサートホールでの、写真の撮影・録音・録画はご遠慮ください。

また、携帯電話、時計のアラームなどは、音が鳴りませんように、お気をつけください。

以上、ご協力のほど、お願い申し上げます。

第70回定期演奏会

The 70th Regular Concert

指揮：ヘルムート・ヴィンシャーマン

Conductor: Helmut Winschermann

J.S. バッハ：

ブランデンブルク協奏曲 第5番 ニ長調 BWV1050

J.S.Bach: Brandenburg Concerto No.5 in D major BWV1050

フルート独奏：フェリックス・レングリ

Flute solo: Felix Renggli

ヴァイオリン独奏：潮田益子

Violin solo: Masuko Ushioda

チェンバロ独奏：クリスティーネ・ショルンスハイム

Harpichord solo: Christine Schornsheim

J.S. バッハ (ヴィンシャーマン編曲)：

ゴルトベルク変奏曲 BWV988

第1部 (主題から第15変奏まで)

J.S.Bach (arr. Winschermann): Goldberg Variations BWV988

Part 1 (Aria - Variation 15)

——— 休 憩 Intermission ———

J.S. バッハ (ヴィンシャーマン編曲)：

ゴルトベルク変奏曲 BWV988

第2部 (第16変奏から主題回帰まで)

J.S.Bach (arr. Winschermann): Goldberg Variations BWV988

Part 2 (Variation 16 - Aria)

合唱 (第30変奏)：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

Chorus (Variation 30): Morioka Bach Kantaten Verein

J.S. バッハ：

管弦楽組曲 第3番 ニ長調 BWV1068

J.S.Bach: Orchestral Suite No.3 in D major BWV1068

●出演者

(各パート五十音順 ●はATMアンサンブルメンバー *はゲスト)

指揮 ヘルムート・ヴィンシャーマン

ヴァイオリン 井上静香* 植村太郎* 潮田益子 久保田 巧

島田真千子* 田中直子 豊嶋泰嗣 中村静香

沼田園子 堀 伝 松野弘明* 陆 威* 渡辺實和子

ヴィオラ 江戸純子 モーリン・ガラガー 川崎雅夫 店村真積

チェロ 上村 昇* 趙 静* 原田禎夫 堀 了介 松波恵子

コントラバス 池松 宏* 黒木岩寿

フルート フェリックス・レングリ*

オーボエ 荒 絵理子* (<ゴルトベルク変奏曲>ではオーボエ・ダモーレを演奏)

ミシェル・ジブロー*

イングリッシュ・ホルン 大島弥州夫*

ファゴット ダーグ・イエンセン

トランペット 杉木峯夫 中澤孝之* デイヴィッド・ヘルツォーク*

ティンパニ 竹原美歌*

チェンバロ クリスティーネ・ショルンスハイム*

合唱 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

ステージマネージャー 宮崎隆男

バッハ語を求めて——

バッハ研究とバッハ演奏の現在

樋口隆一

(明治学院大学教授、音楽学・指揮)

ライプツィヒは昔も今もバッハの町だ。かつてバッハが毎週教会カンタータを上演した聖トマス教会と聖ニコライ教会は、いまなお町のシンボルであり続けている。

初めてこの町を訪れたのは1972年、わたしはまだ26歳だった。バッハ・アルヒーフで始めた研究生活もエキサイティングだったが、はじめて聖トマス教会で8声のモテット〈主に新しき歌を歌わん〉BWV225を聴いたときは、身が震えるほど感動した。トマス・カントルは、ハンス・ヨアヒム・ロッチュに代わったばかりだったが、巨匠エアハルト・マウエルスベルガーにも研究所で紹介され、激励されたことを憶えている。あれから35年、曲がりなりにもバッハの研究を続けてこられたのも、あのときの感動に支えられてこそだったのかもしれない。

近年はふたたびライプツィヒとの結びつきが強くなった。昨2006年6月には指揮者として国際バッハ音楽祭に招待され、聖ニコライ教会での聖霊降臨祭礼拝でカンタータ〈かくも神は世を愛したまえり〉BWV68ほかを指揮した。明治学院バッハ・アカデミー合唱団を連れて行ったが、オーケストラは地元の古楽器

アンサンブルを使わせてもらった。ドイツの教会音楽の常で、練習はたった1回しかできなかったが何の問題もなく、私たちは「バッハ語」という共通語で心を通わすことができたのは感動的だった。

ことし(2007年)の国際バッハ音楽祭では、6月13日に聖トマス教会で『新バッハ全集』の「完結記念式典」があり、こんどは研究者として招待された。この全集の教会カンタータの巻を校訂しているからである。日本でもNHKテレビのニュースで報道されたいが、56年の歳月をかけたドイツ音楽学最大のプロジェクトの完結は、私自身にとってもいわば人生の一部ともいえる大イベントだった。なにしろ楽譜だけでも全103巻、校訂報告書が全101巻におよび、横に並べると4メートルを超える大全集だ。

1950年に始まったこの大全集の編纂事業は、そのままバッハ研究の歴史であり、バッハの演奏の変遷にも大きな影響を与えてきた。良心的な演奏家ならだれでも、バッハの意図を反映した、より良い楽譜に基づいて演奏したいと思うものだ。校訂方法が確立されていなかったかつての印刷楽譜には、音そのものが間違っていたものもあるが、特にスタッカートやスラーなどの演奏に関する指示が不正確なものが少なかった。それらの解釈にしても、当時の楽器に関する

知識や、演奏法、演奏習慣に関する知識がなければ、納得のいく解決を見つめることは容易ではない。

過去半世紀、少なくともヨーロッパでは、こうした問題意識に基づいたさまざまな議論と試行錯誤が行われてきた。音楽学者と演奏家との対話も活発である。シュトゥットガルト国際バッハ・アカデミーの活動を通して、そうした対話の場を提供してきたのはヘルムート・リリングであり、音楽学的な興味から出発して刺激に満ちた演奏活動を展開してきたのがニコラウス・アーノンクールである。ウィリアム・クリスティやクリストファー・ホグウッド、ロジャー・ノリントンといった人たちも、音楽学から出発して演奏実践に活躍の場を広げた人たちである。忘れてならないのは、これらの個性的な演奏家たちの演奏解釈が、それぞれ「ひとつの提案」であり、意見表明である、という事実である。バッハの演奏に関して言えば、ドイツではすでに20世紀前半に、ライプツィヒやベルリンを中心としたひとつの伝統が形成されつつあったことを忘れてはいけない。戦後の混乱期にライプツィヒからミュンヘンに転身したカール・リヒターこそは、その代表選手であり、彼が手兵ミュンヘン・バッハ合唱団を指揮した〈マタイ受難曲〉BWV244の1959年の録音こそは、

いわゆるドイツ伝統のバッハ解釈の頂点と言っても過言ではない。カール・ミュンヒンガー指揮シュトゥットガルト室内管弦楽団も一世を風靡した。

日本のバッハ愛好家にとって忘れられない出来事は、ヘルムート・ヴィンシャーマン指揮ドイツ・バッハ・ゾリステンの来日だろう。1962年以来、なんどか来日したが、彼らの躍動的な演奏は、日本の聴衆に大きな衝撃を与えた。その彼が、水戸室内管弦楽団を指揮するというのは、大きな出来事ではないか。彼らの演奏は現代楽器を用いたものであることはいうまでもない。

古楽器(オリジナル楽器、ピリオド楽器)への関心は、すでにかなり前から存在した。ヒンデミットやライトナーが関わったケルンのカペラ・コロニエンシスや、アウグスト・ヴェンツィンガー指揮パーゼル・スコラカントルム合奏団といった先駆者たちの後、彗星のように躍り出て賛否両論の嵐に巻き込まれたのがアーノンクール指揮ウィーン・コンツェントゥス・ムジクスの活動だった。オランダのグスタフ・レオンハルトとともにいった古楽器によるバッハ・カンタータ全曲録音はまさに記念碑的の偉業だが、私が留学していた1970年代のドイツではまったく評判が悪く、彼は周囲の無理解と戦い続けていた。その彼の主張がようやく

理解されるようになったのは、1982年に『音話としての音楽——新しい音楽理解への道 (Musik als Klangrede)』を発表してからだと思う。これはザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学での講義ノートに端を発したもので、2～3世紀も前の音楽を演奏するには、知っておかねばならない知識がいろいろあるのだという当たり前のことを一般にわからせるという意味で、決定的な役割を演じた。アーノクールの活動に興味を持っていた私は、後年その日本語訳『古楽とは何か——言語としての音楽』(1997年、音楽之友社)を上梓することができたが、このことは古楽の理解のためというよりも、古い音楽における研究と実践の関わりについて日本の聴衆に伝えることができたという意味で、意義があったと自負している。その後、私自身もささやかではあるが、2000年に明治学院バッハ・アカデミーを設立して、第一線の古楽器奏者たちとの「バッハ語による対話」を楽しんでいる。アーノクールもその後、ベートーヴェンから新ウィーン楽派にいたる幅広いレパートリーを、音楽学的アプローチによって新たに見直すという方向で大成功を収めた。2005年11月、アーノクールは「京都賞」を受章し、わたしもまたシンポジウムや公開練習の通訳などでお助けすることができた

のは、感慨深いことであった。

1982年にCD(コンパクト・ディスク)という新しいメディアが市場に登場すると、いわゆる「古楽ブーム」が始まった。「古楽器を使った爽やかな演奏」とか「気軽に聞けるバロック音楽」は、「ウォークマンの登場」も可能としたこの新しい手軽なメディアにふさわしかったのである。「古楽風の演奏」といった訳の分からない概念も登場し、演奏家の間でもけっこうお手軽な「流行追随」が行われた。

近年ヨーロッパでは、そうした過渡期的現象は去ったようだ。現代楽器の演奏家たちも、歴史的演奏習慣を学ぶのは当たり前になってきたし、古楽器奏者たちも、流行に便乗して単に「古楽風の演奏」を模倣するようなことは少なくなってきた。当たり前のことだが、どんな楽器を使っても、さまざまな知識を駆使し、バッハが遺した楽譜そのものからメッセージを引き出そうと努力した人だけが、その人なりの「バッハ語」を獲得することができるのである。まさにその意味では、リヒターやヴィンシャーマンの偉業が再評価される時代にもなったのである。



J.S. バッハ：ブランデンブルク協奏曲 第5番 二長調 BWV1050

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)の6曲の〈ブランデンブルク協奏曲〉は、ブランデンブルク辺境伯クリスティアン・ルートヴィヒに捧げられている。このように、権力者に作品を献呈することは、当時の音楽家にとってはごく当然のことだった。曲集は、被献呈者の名をとって〈ブランデンブルク協奏曲〉と呼ばれるが(『バッハ伝』を著したシュピッタの命名)、1721年3月24日の日付をもつ献呈譜の正式名称はくさまざまな楽器による協奏曲 Concerts avec plusieurs instruments〉である。

その本来の名が示すとおり、6曲の編成は多様で、音楽的内容共々ひとつとして似た傾向のものが無い。これらはいずれも、バッハが当時務めていたケーテンの宮廷楽団のために書いた多数の協奏曲(曲によってはそれ以前に成立が遡るかもしれない)から、選りすぐられた作品の改作だった。〈第1番〉や〈第5番〉

は改作前の初期稿も残り、いかにバッハがていねいに各作品を磨き上げていったかの過程がわかる。バッハが学んだイタリアの協奏曲の様式や語法が、ここでは多彩な手法で展開され、偉大な集成をなしている。

〈第5番〉はフルート、ヴァイオリン、チェンバロを独奏楽器とする。それまで合奏においては主に通奏低音の役割だったチェンバロを独奏楽器においたのがまずユニークで、その活躍は第1楽章後半に現れる65小節に及ぶカデンツァで頂点を極める。初稿では18小節だったこのカデンツァが華麗に拡大された経緯については、1719年にバッハがベルリンから購入した新しいチェンバロがきっかけとなったとする見方が強い。まだ第2ヴァイオリンのパートがないのは、ケーテンの楽団で通常ヴィオラを担当していたバッハがここではチェンバロを弾くので、空席になったヴィオラの代理を第2ヴァイオリン奏者が務め、よってバッハは第2ヴァイオリン・パートなしでこの曲を書かねばならなかったため、と推察されている。

第1楽章

アレグロ(快速に)ニ長調 4/4拍子
リトゥルネッロ形式。冒頭の力強い主題がさまざまな形で何度も姿を現す間に、3つの独奏楽器の魅力的なエピソードが

はさまれてゆく。

第2楽章

アッフェットゥオーソ（情愛を込めて）
ロ短調 4/4拍子 独奏楽器三者による、
カノンの技法を巧妙に用いた悲愴なトリオ。

第3楽章

アレグロ ニ長調 2/4拍子。フーガを用いた主部に、歌に溢れたロ短調の間部がはさまれる。

J.S.バッハ（ヴィンシャーマン編曲）： ゴルトベルク変奏曲 BWV988

〈ゴルトベルク変奏曲〉もまた、〈ブランデンブルク協奏曲〉同様、権力者が曲の成立に介在している。フォルケルの『バッハ伝』によれば、バッハはロシア公使カイザーリンク伯爵の不眠を癒すために、この長大な変奏曲を書いた、という。ゴルトベルクは、伯爵お抱えのクラヴィーア（当時の鍵盤楽器の総称）奏者の名であり、曲名もここに由来する。

逸話の真偽は不明だが、〈ゴルトベルク変奏曲〉が、〈ブランデンブルク協奏曲〉同様、成立の事情はともかく最終的には「バッハ自身のため」の作品であることは間違いのない。この曲は1741年に『クラヴィーア練習曲集 第4部』として出

版された、バッハ最後のクラヴィーアのための出版作品なのである。〈パルティータ〉〈イタリア協奏曲〉〈フランス風序曲〉と続いてきたさまざまなクラヴィーア用曲種の集成の試みの最後に、彼はこの大変奏曲をおいた。

〈アンナ・マグダレーナ・バッハのためのクラヴィーア小曲集〉に収められた小さなフランス風サラバンド（正確にはその低音部）を主題とするこの変奏曲は、簡素な主題からは想像できないほどの壮大な規模と緻密な構成を誇る。まず、主題に基づく30の変奏が続き、最後に主題が回帰する円環構造。また、変奏は3つずつ1つのグループをなし、3つ目ごとにカノンが置かれる。さらに、カノンの音程関係は、同度からはじまり1度ずつ広がってゆく。つまり9番目のカノン（第27変奏）は9度のカノンとなるが、順番からすれば次にカノンが登場するはずの第30変奏は2つの民謡を連ねた「クォドリベット」（ラテン語で「お好きなように」の意味。よく知られた曲の旋律を組み合わせで作った曲のこと）。その中には「わしはしばらくお前に会わぬ、さあおいで」という内容のものが含まれ、主題の再帰を暗に、そして愉快地に予告する。

〈ゴルトベルク変奏曲〉は近年さまざまな形に編曲されているが、本日はヴィ

ンシャーマン編曲の室内管弦楽版が演奏される。ヴィンシャーマンは第30変奏で民謡を合唱で歌わせる。編曲の意図については別頁のヴィンシャーマン自身による解説をご覧いただきたい。ここでは各変奏と、ヴィンシャーマンが指示した楽器編成（〔 〕で示す）を記す。これらの楽器編成は部分的に変更される可能性もある。なお、調性は特記なきものはすべてト長調。

【第1部】

- 主題 3/4拍子〔チェンバロ（ソロ）〕
第1変奏 3/4拍子〔全合奏〕
第2変奏 2/4拍子〔オーボエ、オーボエ・ダモーレ、ファゴット（各ソロ）〕
第3変奏 同度カノン 12/8拍子
〔ヴァイオリン1&2、チェロ（各ソロ）〕
第4変奏 3/8拍子〔全合奏〕
第5変奏 3/4拍子
〔弦楽合奏（コントラバス除く）〕
第6変奏 2度カノン 3/8拍子〔ヴァイオリン1、ヴィオラ、チェロ（各ソロ）〕
第7変奏 6/8拍子
〔オーボエ、ファゴット（各ソロ）〕
第8変奏 3/4拍子〔弦楽合奏、ファゴット〕
第9変奏 3度カノン 4/4拍子〔ヴァイオリン1、チェロ、オーボエ・ダモーレ（各ソロ）〕

第10変奏 フゲッタ 2/2拍子〔全合奏〕

第11変奏 12/16拍子
〔ヴァイオリン1、チェロ（各ソロ）〕

第12変奏 4度カノン（反行カノン） 3/4拍子
〔弦楽合奏（ヴァイオリン2を除く）〕

第13変奏 3/4拍子〔オーボエ（ソロ）、弦楽合奏（ヴァイオリン除く）〕

第14変奏 3/4拍子〔ヴァイオリン1&2、ヴィオラ、チェロ、オーボエ（各ソロ）、全合奏〕

第15変奏 ト短調 アンダンテ 5度カノン（反行カノン） 2/4拍子〔弦楽合奏（ヴァイオリン2除く）〕

【第2部】

第16変奏 序曲 4/4拍子〜3/8拍子
〔全合奏〕

第17変奏 3/4拍子〔オーボエ、イングリッシュ・ホルン、ファゴット（各ソロ）〕

第18変奏 6度カノン 2/2拍子〔弦楽合奏〕

第19変奏 パスピエ 3/8拍子〔オーボエ、オーボエ・ダモーレ、イングリッシュ・ホルン、ファゴット（各ソロ）、弦楽合奏（ヴァイオリン1を除く）〕

第20変奏 3/4拍子〔弦楽合奏（ヴィオラを除く）〕

第21変奏 ト短調 7度カノン 4/4拍子
〔オーボエ、イングリッシュ・ホルン、ファゴット（各ソロ）〕

- 第22変奏 アラ・プレーヴェ 2/2拍子
[全合奏]
- 第23変奏 3/4拍子 [ヴィオラ(ソロ)、弦
楽合奏(コントラバス除く)]
- 第24変奏 8度カノン 9/8拍子 [オーボエ、
イングリッシュ・ホルン、ファゴ
ット(各ソロ)]
- 第25変奏 ト短調 3/4拍子 [ヴァイオリン
1、ヴィオラ、チェロ(各ソロ)]
- 第26変奏 3/4拍子 [ヴァイオリン1、ヴィ
オラ、チェロ(各ソロ)、オーボエ、
オーボエ・ダモーレ、イングリッ
シュ・ホルン、弦楽合奏(チェロ、
コントラバス除く)]
- 第27変奏 9度カノン 6/8拍子 [オーボエ、
ファゴット(各ソロ)]
- 第28変奏 3/4拍子 [弦楽合奏]
- 第29変奏 3/4拍子 [ヴァイオリン1&2、
ヴィオラ、チェロ(各ソロ)、全合
奏]
- 第30変奏 クォドリベット 4/4拍子 [全合
奏、合唱]
- 主題回帰 [チェンバロ(ソロ)]

クォドリベット (Quodlibet) 歌詞

1) Ich bin so lang nicht bei dir gewest.
(お前のところに来るのは、本当にひさ
しぶりだね。)

2) Kraut und Rüben haben mich vertrie-
ben. Hätt' dein' Mutter Fleisch gekocht,

so wär ich länger blieben. (キャベツや
カブラばかりだとうんざりで、足が遠の
いたよ。母さんが肉料理を作っていてく
れたら、もっと長くいたんだけど。)

(訳: ヴィンシャーマン 翠)

J.S. バッハ: 管弦楽組曲 第3番 二長調 BWV1068

17世紀のフランスで生まれた管弦楽
組曲は、宮廷の舞踏会の伴奏音楽とし
て書かれ、冒頭にオペラの序曲を置き、
舞曲の数々を連ねたものに起源を持つ(冒
頭の曲の名をとって「序曲」と呼ばれる)。
バッハも4曲の「序曲」、すなわち管弦楽
組曲(〈第5番〉は偽作)を残しているが、
〈ブランデンブルク協奏曲〉と違い、ひ
とつの曲集としてのまとまりをなして
はいない。おそらくはもっとたくさんの
管弦楽組曲が書かれ、この4曲が幸運に
も(あるいは何らかの意志により)散失
の運命から逃れたのだろう。これらは個々
の作品として伝えられ、作曲年代につ
いても諸説ある。現在伝承されている
もっとも古い演奏譜はバッハのライブ
ツィヒ時代、1720年代から30年代にか
けて残されたもの。おそらく、市の公式
行事や、彼が指揮したライブツィヒ大
学の演奏団体「コレギウム・ムジクム」

のために作曲(あるいは旧作を改作)さ
れたものと考えられる。

〈第3番 二長調 BWV1068〉はトラ
ンペット3本とティンパニを備え、その
輝かしい響きは、なにか公式の祝典のた
めにこの曲が演奏されたことを連想さ
せる。一方、序曲の急速部分で現れる独
奏ヴァイオリンの活躍から、この曲が失
われたヴァイオリン協奏曲を原曲とし
ているという説もある。曲は、華麗な序
曲で始まり、19世紀にヴィルヘルミが
ヴァイオリンのための〈G線上のアリア〉
に編曲したことで有名な〈エア〉が続く。
その心安らぐ音楽の後には、ふたたび晴
れやかな舞曲が3曲続く。終曲に向けて
力強さを増してゆくように、3曲は巧妙
に配置されている。

- 第1曲 序曲 4/4拍子~2/2拍子
第2曲 エア 4/4拍子
第3曲 ガヴォットI & II 2/2拍子
第4曲 プレー 2/2拍子
第5曲 ジグ 6/8拍子

水戸芸術館音楽部門 矢澤孝樹

ゴルトベルク変奏曲について

ヘルムート・ヴィンシャーマン

今回、水戸室内管弦楽団の演奏会で、
私が皆さんにお聴きいただきたい〈ゴル
トベルク変奏曲〉は、バッハ自身もよく
自作や、または他の作曲家(アルビノー
ニ、マルチェッロ、ヴィヴァルディなど)
の曲を編曲しましたが、それに相当する
ものです。

オリジナルは、二段鍵盤のチェンバ
ロのために作曲されたものですが、私の
編曲は種々の楽器を用いたもので、以
前行った〈フーガの技法〉と〈音楽の捧
げ物〉の編曲での経験が生かされてい
ます。ここでもオーボエ、ファゴット、
弦楽器、チェンバロを用いて、バッハの
管弦楽曲やカンタータで耳馴れた響き
を再現しようと試みました。

このような多楽器のアンサンブルで
演奏すると、それらが織りなすいくつも
の音色の変化によって、それぞれのヴァ
リエーション(変奏曲)のキャラクター
の相違を、チェンバロのみで全曲演奏
する場合と、(少なくとも)同じくらい
よくアピール出来ると考えます。

特に、次にあげる変奏曲(私は“キャ
ラクターヴァリエーション”と呼んでい
ます)は、いくつかの違った楽器で演奏
するのに適しています。

Var. 1 器楽協奏曲 (例えばコンチェルト
グロッソ) のオープニング

Var. 2 期待

Var. 3 パストラレー (田園風)

Var. 4 跳躍ダンス

Var. 13 アリア、歌

Var. 15 嘆き、なぞ

Var. 16 フランス序曲風

Var. 19 レントラー舞曲

Var. 21 胸の痛み

Var. 22 陽気なりチェルカーレ

Var. 25 アリア (なげきのアダージョ)

Var. 26 サラバンド

Var. 28 気まぐれな、宙に舞うような

Var. 30 クォドリベット (バッハ家の家
族の集い。楽しく、はしゃいで)

二つの歌

“お前と本当に長く会ってないよ”

“キャベツとかぶらはもう沢山だよ。母
さんが肉料理をしてくれていたらもっ
と長くいたのに”

(この二つの民謡に使われているメロ
ディーが対位法的に進行する。)

〈ゴルトベルク変奏曲〉は、非常に厳
格なリズム構成と、2つの変奏曲の後
にいつもカノンが置かれているという
点、他のベートーヴェン、シューマン、
ブラームス、レーガー等の変奏曲と異な
っています。

私と数々のコンサートを共にしたカ
ール・リヒターは、この曲について次の
ように語っています。

「ゴルトベルク変奏曲の演奏解釈に対
する決定的な答えはないだろう。何故
ならバッハの音楽が偉大すぎ、それに
比べて我々演奏家は人間として完
璧でないから。」

ドイツと全世界にバッハ演奏家とし
て名を馳せ、早くしてこの世を去った芸
術家、カール・リヒターを偲んで……。

(訳: ヴィンシャーマン 翠)

Interview

with Maestro Helmut Winschermann

ヘルムート・ヴィンシャーマン

—マエストロ・ヴィンシャーマン、水戸
室内管弦楽団 (MCO) を指揮していた
だけることになり嬉しく存じます。初め
ての共演となるMCOについて、どのよ
うな期待を抱かれていますか。

ヴィンシャーマン: 今回、MCO よりお
招きいただき、バッハ・プログラムを客
演指揮できることは大きな喜びです。

マエストロ・オザワのスピリットと完
璧さがこのアンサンブルに大きな影響
を与えているでしょうから、世界の名だ
たる室内オーケストラと比肩できる水
準と信じ、大いに期待しています。個々
が素晴らしいアーティストであるメン
バーの皆さんが、色々な地からコンサ
ートの度に集い、彼らの芸術的輝きをア
ンサンブルにもたらしおられるでし
ょう。

私のアンサンブル、ドイツ・バッハ・
ゾリステンも自由なメンバー構成で、そ
の点MCOと似ているのではないでしょ
うか。

—長きにわたり、バッハ演奏の第一人
者として活躍してこられたマエストロ
の指揮によるバッハ・プログラムを聴く

ことができるのは、私たちにとって大き
な喜びです。バッハの音楽の何がマエス
トロを魅了してきたのか、その魅力につ
いてお話しいただければと思います。

ヴィンシャーマン: 現在、ヨーロッパ音
楽界で私はドイツのバッハ演奏家のシ
ニアー (長老) と呼ばれています。

バッハの音楽で私が最も魅せられる
のは、受難曲やカンタータのコラールが
持つ「強さ」です。テキストのない器楽
曲でも、コラールがあちこちに聴こえて
きます。

バッハの歌うような旋律はほとん
どの器楽曲で、緩やかな楽章のみでなく、
テンポの速い楽章にもはっきり流れて
います。力強い「歌」があります。また、
躍動するリズムは素晴らしく、受難曲
にさえリズムミカルな曲が出てくるので
す。舞曲も好きだったのでしょ。沢山書
いています。

そして、私は彼のほとんどの作品に、「神
への愛」を感じます。これらの要素すべ
てが、私を魅了するのです。

—〈ブランデンブルク協奏曲 第5番〉と
〈管弦楽組曲 第3番〉はいずれもバッハ
の傑作として知られていますが、マエス
トロの感じる、それぞれの曲のすばらし
い点についてお聞かせください。

ヴィンチャーマン：〈ブランデンブルク協奏曲 第5番〉第1楽章の出だしの、連打音の昇がおもしろいですね。（第1楽章終盤に現れるチェンバロの）大カデンツァは、前例のないもので、当時センセーショナルだったでしょう。第2楽章に“AFFETTUOSO”（イタリア語で「情愛を込めて」）と記されていますが、バッハがこの楽語を使ったのは、私の知る限りこの曲だけなので大変興味深いです。第3楽章は飛び跳ねるダンスですね。

調性はニ長調で、「喜び」の調です。そして、〈管弦楽組曲 第3番〉もニ長調です。トランペットとオーボエが喜ばしく輝かしい音色を聞かせてくれるでしょう。2番目のエアは美しく、心が鎮まります。

—今回のプログラムには、マエストロの編曲による〈ゴルトベルク変奏曲〉の室内管弦楽版が含まれています。この曲は近年さまざまな形での編曲版が登場していますが、マエストロの編曲版の特色はどのような点にありますか。また、なぜこの作品を編曲されることを考えられたのでしょうか。

ヴィンチャーマン：バッハも、ここで言う「編曲」を自作や他の作曲家の曲で、よくやりました。私が編曲した〈フーガ

の技法〉は、世界各国で100回以上演奏してきました。その成功に勇気を得て、〈音楽の捧げ物〉、〈高き天よりわれは来たり〉（オルガン曲）、〈イタリア協奏曲〉なども編曲しました。

今回演奏する〈ゴルトベルク変奏曲〉の私の編曲の特色は、弦以外に管楽器も加えたことです。オリジナルはクラヴィーア（チェンバロなど当時の鍵盤楽器の総称）のみでの全曲演奏ですが、管弦楽のアンサンブルによって、30の変奏曲に音色とキャラクターの変化を出すよう試みました。管楽器を加えたのは世界で初めてだと思います。

（編集部注：詳しくは、別掲『ゴルトベルク変奏曲について』をご覧ください。）

—マエストロは戦後ヨーロッパのバッハ演奏における文字通りのパイオニアとして、半世紀近く活躍してこられました。マエストロの拓いた道が現在のバッハ演奏の活況につながっていると言えますが、当時から今に至るバッハ演奏の変化について、お考えをお聞かせください。

ヴィンチャーマン：1948年にデトモルト国立音楽大学で教鞭をとり始めた頃、若いオーボエ奏者の私はすでにバッハのスペシャリストの道を歩んでいました。

私のモットーは昔も今も、「明晰に、生き生きと、喜ばしく」です。これは、バッハの人生のモットーでもあったと思います。

昔、他の指揮者のもとの、ソリストとしてオラトリオ、〈ブランデンブルク協奏曲〉などおびただしい数の演奏をしましたが、当時はテンポが遅すぎ、19世紀の影響が強く、バロック・スタイルでの表現が欠けていたり、「歌」（旋律）が流れていないなど、気に入りませんでした。今振り返っても、その頃の演奏はそれなりに価値があるのですが、21世紀の現在には合わず、少々退屈なのです。（カール・リヒターとガーディナーの違いを聴いてみて下さい。）

私は自身の指揮、およびオーボエ・ソロを通して、1948年頃から今日に至るまで年々活気のあるテンポ、そして「楽器で歌う」ことに重点をおいて来ました。新バッハ原典版が出版されてからは、一般にだんだんオリジナルに近い演奏がされるようになってきましたね。

—最後に、マエストロとの出会いを楽しみにしている水戸の聴衆に向けて、メッセージをお願いします。

ヴィンチャーマン：水戸には、ドイツ・バッハ・ゾリステンと何回か訪れていま

すので、今回も皆さんにお会い出来るのを楽しみにしています。毎年ライブツィヒのトーマス教会を訪れ、バッハの愛したコラールのメロディ〈主は我が喜び〉（Jesus bleibet meine Freude）を心の中で歌いながら墓石に花を捧げる87歳のバッハ演奏家が、どんなに生き生きとし、楽しげかを、見て下さい。

（訳：ヴィンチャーマン 翠）

〔当インタビュー記事は、水戸芸術館音楽紙 vivo 10&11月号から転載しました。〕



ヘルムート・ヴィンシャーマン (指揮)
Helmut Winschermann, Conductor

1920年ドイツのルール地方ミュールハイムに生まれる。エッセンとパリで学び、ヘッセン(フランクフルト)放送交響楽団、コンサートヘボウ管弦楽団などのソロ・オーボエ奏者を務めた後、1960年ドイツ・パッサ・ゾリスデンを創立。以来、芸術監督として50余年、この室内オーケストラを特にパッサ演奏においては世界的権威を誇る演奏団体に育てあげた。ヴィンシャーマンは、オーボエを手にしても、指揮棒を握っても、ステージに立つときは常に、「明晰に、生き生きと、喜ばしく」という自身のモットーを貫いてきた。

名オーボエ奏者として一世を風靡した一方、ヴィンシャーマンは優れた教育者としても知られ、ハンスイェルク・シェレンベルガー、

宮本文昭らを輩出したことは有名である。

指揮者としては、世界各地のオーケストラに客演しているほか、1998年1月にはユネスコ本部からの依頼によりパリで「平和のためのチャリティー・コンサート」を指揮、絶賛を博した。

CD・レコードはドイツ・グラモフォン、フィリップス、RCA、ナミレコードなどから100枚以上がリリースされ、いずれも高い評価を得ている。

長年の文化的功績が称えられ、ドイツ政府より最高の一等功労十字勲章、エディソン賞(2回)、グスタフ・マーラー賞、ドイツ・ヘンデル賞などを受賞している。1992年には、ロンドン王立音楽アカデミー委員会で満場一致で「名誉会員」の称号を授与された。



フェリックス・レングリ (フルート)
Felix Renggli, Flute

スイスのバーゼルに生まれる。バーゼル音楽院でゲルハルト・ヒルデnbrラント、ペーター・ルーカス・グラーフに師事。その後、オーレル・ニコレのもとで研鑽を積む。さまざまな国際コンクールに入賞し、その実力は早くから注目を集めた。サンクト・ガレン交響楽団、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団、ルツェルン祝祭管弦楽団などの奏者を歴任し、ソリストとなる。パリ、ルツェルン、リマ等の国際音楽祭へのゲスト出演のほか、室内楽の分野でも活躍し、アンサンブル・コントルシャン、ヘリオストリオのメンバーを務める。CDも、ハインツ・ホリガー(オーボエ)、アルディッティ弦楽四重奏団との共演や、アンサンブル・コントルシャンのアルバムをリリースして

いる。レパートリーは幅広く、18世紀のオリジナル楽器の演奏から現代音楽にまで至る。

現在、グラーフの後任としてバーゼル音楽院教授。ドイツ・フライブルク音楽大学教授。世界各地でマスタークラスを行っている。



クリスティーネ・ショルンスハイム (チェンバロ)
Christine Schornsheim, Harpsichord

ベルリンのC.P.E.バッハ音楽高等学校、
ベルリン・ハンス・アイスラー音楽院で学ぶ。
また、グスタフ・レオンハルト、トン・コ
ープマン、アンドレアス・シュタイアーと
いった著名な演奏家のマスタークラスを
受けた。

1985年以降フリーランスのチェンバロ
奏者として活躍し、小澤征爾、クラウディオ・
アバド、ゲオルク・ショルティ、ヘルムート・
リリング、ペーター・シュライアーといっ
た数多くの著名な指揮者と共演。また、独
奏者としても、シュレスヴィヒ・ホルシュ
タイン音楽祭、ウィーン・オルガン・フェ
スティバル、アンスバッハ・バッハ週間
など、さまざまな音楽祭にチェンバロ奏者、
フォルテピアノ奏者として出演。1997年お

よび2000年には、サイトウ・キネン・フェ
スティバル松本からも招かれた。

CDは、『ゴルトベルク変奏曲』、『バッハ：
チェンバロ小品集』、『モーツァルト：ピア
ノ協奏曲第17番・第19番』など数多くリリ
ースしている。中でも『ハイドン：ピアノ・
ソナタ全集』は、ドイツ・レコード批評家賞、
ディアパソン・ドールを受賞し、高く評価
された。

現在、ミュンヘンの音楽演劇アカデミー
の教授として、後進の指導にもあたっている。

ヴァイオリン Violin



井上静香
Shizuka Inoue

ヴァイオリン Violin



植村太郎
Taro Uemura

ヴァイオリン Violin



潮田益子
Masuko Ushioda

ヴァイオリン Violin



久保田 巧
Takumi Kubota

ヴァイオリン Violin



島田真千子
Machiko Shimada

ヴァイオリン Violin



田中直子
Naoko Tanaka

ヴァイオリン Violin



豊嶋泰嗣
Yasushi Toyoshima

ヴァイオリン Violin



中村静香
Shizuka Nakamura

ヴァイオリン Violin



沼田園子
Sonoko Numata

ヴァイオリン Violin



堀 伝
Tadashi Hori

ヴァイオリン Violin



松野弘明
Hiroaki Matsuno

ヴァイオリン Violin



陆 威
Wei Lu

ヴァイオリン Violin



渡辺實和子
Miwako Watanabe

ヴィオラ Viola



江戸純子
Sumiko Edo

ヴィオラ Viola



モーリン・ガラガー
Maureen Gallagher

ヴィオラ Viola



川崎雅夫
Masao Kawasaki

ヴィオラ Viola



店村眞積
Mazumi Tanamura

チェロ Violoncello



上村 昇
Noboru Kamimura

チェロ Violoncello



趙 静
Jing Zhao

チェロ Violoncello



原田禎夫
Sadao Harada

チェロ Violoncello



堀 了介
Ryosuke Hori

チェロ Violoncello



松波恵子
Keiko Matsunami

コントラバス Double-bass



池松 宏
Hiroshi Ikematsu

コントラバス Double-bass



黒木岩寿
Iwahisa Kuroki

オーボエ Oboe



荒 絵理子
Eriko Ara

オーボエ Oboe



ミシェル・ジブロー
Michel Giboureau

イングリッシュ・ホルン
English-horn



大島弥州夫
Yasuo Oshima

ファゴット Bassoon



ダーク・イェンセン
Dag Jensen

トランペット Trumpet



杉木峯夫
Mineo Sugiki

トランペット Trumpet



中澤孝之
Takayuki Nakazawa

トランペット Trumpet



デイヴィッド・ヘルツォーク
David Herzog

ティンパニ Timpani



竹原美歌
Mika Takehara

チェンバロ Harpsichord



クリスティーネ・
ショルンスハイム
Christine Schornsheim

ステージマネージャー
Stage Manager



宮崎隆男
Takao Miyazaki



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

Morioka Bach Kantaten Verein

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S. バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。指揮者・佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねによりヴィンチャーマン、ロッチュ、マズア、岩城宏之等世界的指揮者と共演。ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、高い評価を得るようになった。2007年1月のヴィンチャーマンとの〈ヨハネ受難曲〉演奏会で30周年を迎えた。

＜出演メンバー＞

ソプラノ：

赤塚温子 阿久津巴 荒田奈美
尾友佳子 佐々木恵利子 村元彩夏

アルト：

阿部一葉 在原 泉 小川暁美 菊池葉子
茂木容子 吉田智穂

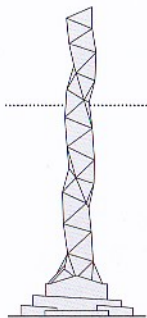
テノール：

佐々木幹雄 西野真史 沼田臣矢
吉村 哲

バス：

佐藤和久 千田敬之 藤村誠毅
藤原広大 横山 泉

＜合唱指揮＞ 佐々木正利



美術館と私

市村國夫

(熊本大学 教授)

水戸に育った私の音楽体験といえば、昭和30年代半ばに県立武道館の場所にあった体育館で大谷洸子さんが歌った〈蝶々夫人〉を見たのが最初でした。大学生活からの10数年を東京で過ごしましたが、この時期は大いに演奏会を楽しむことが出来ました。二晩徹夜して入手したベルリン・フィルのチケット。忘れられないベートーヴェンの交響曲第4番、第7番でしたし、小澤征爾、日フィルのベルリオーズのレクイエムは圧巻でした。またベームやミュンシュ、チェリビダッケ、ジャン・フルネなど鮮明に記憶に残っている演奏会も少なくありません。

20年程前に水戸に戻って来ましたが満たされない時間が始まりました。当たり前聞くことが出来ていた演奏会が聞けなくなり、止む無く東京までしばしば出掛けることとなったからです。辛いのは最終の電車に乗る為に拍手が鳴り続けている会場から小走りに駅に向かわねばならなかったことでした。所謂「余韻に浸る」

ことが出来なかったのです。

そんな或る日、音楽関係の仕事をしている学生時代の友人と水戸の鰻屋で白焼きを摘みに生ビールを半分ほど呑んだ時、(話しがショックだったので記憶が鮮明です)「今度、水戸にオケが出来るといけど知ってる？」と言われたのです。「エーッ!？」古くからの水戸の人間にとって俄かには信じ難いことでした。「しかもメンバーも凄いらしいよ。××さん、○△さん……」と言うではありませんか。その人達はソリストとして記憶されている名前ばかりです。「本当にそんなオケが水戸で聞けるの?1回だけじゃないよね?」という会話をしてからもう時間も随分経ちました。

そして1990年の春です。この水戸美術館の開館です。記念コンサートのポスターは今でも仕事部屋に貼られています。このオケは水戸の否、水戸ばかりではなく多くの音楽を聴く者にとって大きな衝撃でした。MCOのオープニング・コンサートはまさに圧巻でした。この小編成オケがホール全体を震わすように響き、それまで経験したことのない、今でも耳に残っているような驚きの演奏でした。未だ聞いてもいないオケでも「素晴らしい

から、是非聞いて」と何人もの知人にチケットの購入を勧め演奏会後には「凄かった!凄かった!」と興奮して盛り上がり、昂揚した気分です。理由で遅くまで痛飲したものです。

私の演奏会通いは、その90年春にハッキリと線が引かれます。その時を境に演奏会だけの為に東京へ出掛ける事がすっかり少なくなりました。理由は言うには及ばないことです。ここ水戸で、この美術館での演奏会が「聞きたい気持ち」を大いに満たしてくれるからに他なりません。また、学生時代からの音楽好きの友人達は恒例になっている東京での飲み会をMCOの演奏会に合わせて水戸に移動してやろうと言出しチケットの手配に苦勞をさせられているこの頃です。

ところでMCOの定期も70回になります。演奏の水準の高さは言うに及びませんが、加えて選抜されたプログラムにはいつも感心させられています。「名演は?」と問われれば、あれもこれもと限りはありませんが、ある意味で私の音楽の聞き方に揺さぶりを掛け、耳垢なのか耳のウロコを取り払われた様な経験を何度かさされました。

残念ですが亡くなってしまったロストロポーヴィチや、ゲルバーは美術館とは

何か特別な因縁でもあるかのような好演をしています。他所では聞けないような演奏をしている様に感じていますし、ヴァーグナーの自信作だった〈ヴェーゼンドンク歌曲集〉を歌ったN.シュトゥッツマン、宮本文昭のR.シュトラウスのコンチェルト、ポストリッジとバボラークのブリテンの〈セレナード〉と、こんな演奏を聴くことが出来た幸せは、大事な心の財産だと思っています。

日本の、また世界の音楽事情が変わり、地方の状況が変わったとは言っても、ひと昔前の水戸の音楽環境を知り茨城会館や県民文化センター、日立の小平記念館などで音楽を聴いた経験のある人間にとって、この美術館は想像することさえ出来ませんでした。

この水戸美術館から世界にも発信出来る音楽活動が市に支えられていることは大きな市民の誇りです。活動を支える皆さんには、また大なる感謝の気持ちを表したいと思います。

2008年5月～6月に定期演奏会とヨーロッパ・ツアーを予定 第72回定期演奏会&ヨーロッパ・ツアー 指揮:小澤征爾

来年5月から6月にかけて、下記の通り、小澤征爾音楽顧問の指揮により第72回定期演奏会とヨーロッパ・ツアーを行う予定です。MCOにも過去2回登場した人気指揮者、準・メルクルが「MCOは水戸という素晴らしい都市の大使」と評したように、クラシック音楽の本場ヨーロッパで「Mito」の名を背負い、活動の成果を問うてきます。1998年、2001年に引き続き第3回目となる今回のツアーも、ウィーン芸術週間、フィレンツェ5月音楽祭といった高名な音楽祭や由緒ある会場から招待され、全5公演を行います。いずれ劣らぬ歴史的文化都市と世界の音楽家が憧れる会場ばかりです。その成果にどうぞご期待ください。

●定期演奏会:2008年5月28日(水)、29日(木)、30日(金)

会場:水戸芸術館コンサートホールATM

曲目:モーツァルト:歌劇〈コシ・ファン・トゥッテ〉K.588 序曲

モーツァルト:ホルン協奏曲 第3番 変ホ長調 K.447 ※

ホルン独奏:ラデク・パボラーク

細川俊夫:ピアノとオーケストラのための〈月夜の蓮〉

ピアノ独奏:児玉 桃

ベートーヴェン:交響曲 第4番 変ロ長調 作品60

※5月30日は、第4番 変ホ長調 K.495を演奏します。

●ヨーロッパ・ツアー公演日程:

6月3日(火) ミュンヘン 会場:プリンツレゲンテン劇場

6月5日(木) ウィーン 会場:ムジークフェラインザール

6月8日(日) フィレンツェ 会場:テアトロ・コムナーレ

6月10日(火) マドリード 会場:オーディトリオ・ナショナル・ド・ムジカ(国立音楽堂)

6月12日(木) パリ 会場:シャンゼリゼ劇場

※曲目は第72回定期演奏会と同じ(ホルン協奏曲は第4番を演奏)。

モーツァルト・シリーズCD 第3弾がリリース

大好評の小澤征爾&MCOによるモーツァルト・シリーズ(第1弾、第2弾は既発売/詳しくは28、29ページ)。第3弾は、交響曲〈ジュピター〉とヴァイオリン協奏曲〈トルコ風〉のカップリングで、ソニー・ミュージックジャパンインターナショナルから11月21日に発売予定。どうぞお楽しみに。

●小澤征爾&水戸室内管弦楽団 モーツァルト・シリーズ第3弾



交響曲 第41番 ハ長調 K.551〈ジュピター〉

ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K.219〈トルコ風〉

ヴァイオリン独奏:潮田益子

録音:2006年12月(K.551)、2003年2月(K.219)

水戸芸術館でのライブ収録

SA-CDハイブリッド SICC-10069 ¥3,045

水戸室内管弦楽団

総監督 吉田秀和

音楽顧問 小澤征爾

総楽団長 小口達夫

楽団員

(50音順○楽団員代表 ●運営委員 ※曲目検討委員)

ヴァイオリン

※安芸晶子

●潮田益子

川崎洋介

久保田 巧

宗 倫匡

※田中直子

豊嶋泰嗣

中村静香

名倉淑子

沼田園子

○※堀 伝

渡辺實和子

ヴィオラ

今井信子

江戸純子

岡田伸夫

モーリン・ガラガー

※川崎雅夫

川本嘉子

●店村眞積

チェロ

堤 剛

●原田禎夫

※堀 了介

松波恵子

コントラバス

黒木岩寿

フルート

●※工藤重典

ファゴット

ダーグ・イェンセン

ホルン

ラデク・パボラーク

※水野信行

トランペット

杉木峯夫

ステージマネージャー

宮崎隆男

ヴァイオリン

久保陽子

徳江尚子

松原勝也

安田明子

ヴィオラ

生沼晴嗣

チェロ

秋津智承

安田謙一郎

コントラバス

永島義男

フルート

佐久間由美子

オーボエ

ラインハルト・ホルヒ

宮本文昭

ホルン

澤田清春

協賛:第一三共株式会社

株式会社 ポイント

(財)げんでん ふれあい茨城財団

株式会社 吉田石油

協力:全日本空輸株式会社

後援:水戸商工会議所

事務局スタッフ

大津良夫(事務局長)

矢澤孝樹(主任学芸員)

関根哲也(総楽団長補佐)

中村 晃(ライブラリアン)

中崎美智代

佐川真美

●11月後半の定期演奏会のお知らせ

水戸室内管弦楽団第71回定期演奏会

日時:2007年11月24日(土)18:30開演、25日(日)14:00開演

料金:S席 6,500円 A席 5,000円 B席 4,000円

指揮:ジャン＝フランソワ・パイヤール

曲目:ドビュッシー:牧神の午後への前奏曲

シュミット:交響曲〈ジャニアナ〉作品101

ダンディ:古い様式による組曲 ニ長調 作品24

ビゼー:劇音楽〈アルルの女〉から(オリジナル版)

ルセル:舞踊組曲〈くもの宴会〉作品17

フランスの巨匠ジャン＝フランソワ・パイヤールが6年ぶりに水戸室内管弦楽団の指揮台に登場します。近代フランス音楽の金字塔とも言べきドビュッシー〈牧神の午後への前奏曲〉、室内管弦楽によるオリジナル版で演奏するビゼー〈アルルの女〉など、フランス音楽ならではの豊かな色彩と馥郁たる香りを心ゆくまで味わえる演奏会です。残券僅少につき、ご予約はお早めにどうぞ。



第46回定期演奏会(2001年6月)から

水戸室内管弦楽団
2008年の演奏会予定

◎お問い合わせ:水戸芸術館チケット予約センター
TEL.029-231-8000 <http://www.arttowermito.or.jp/>

●第72回定期演奏会&ヨーロッパ・ツアー

定期演奏会:2008年5月28日(水)、29日(木)、30日(金)

会場:水戸芸術館コンサートホールATM

曲目:モーツァルト:歌劇〈コシ・ファン・トゥッテ〉K.588 序曲

モーツァルト:ホルン協奏曲 第3番 変ホ長調 K.447 ※

ホルン独奏:ラデク・パボラーク

細川俊夫:ピアノとオーケストラのための〈月夜の蓮〉

ピアノ独奏:児玉 桃

ベートーヴェン:交響曲 第4番 変ロ長調 作品60

※5月30日は、第4番 変ホ長調 K.495を演奏します。

ヨーロッパ・ツアー公演日程:

6月3日(火)ミュンヘン 会場:プリンツレゲンテン劇場

6月5日(木)ウィーン 会場:ムジークフェラインザール

6月8日(日)フィレンツェ 会場:テアトロ・コムナーレ

6月10日(火)マドリード 会場:オーディトリオ・ナショナル・ド・ムジカ
(国立音楽堂)

6月12日(木)パリ 会場:シャンゼリゼ劇場

※曲目は第72回定期演奏会と同じ(ホルン協奏曲は第4番を演奏)。

●第73回定期演奏会

日程:2008年7月5日(土)、6日(日)

指揮:準・メルクル

曲目:R.シュトラウス:メタモルフォーゼン

ベートーヴェン:交響曲 第6番 へ長調 作品68〈田園〉 ほか

●第74回定期演奏会

日程:2008年11月8日(土)、9日(日)

コントラルト:ナタリー・シュトゥッツマン

曲目未定



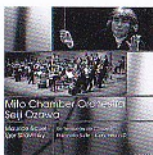
水戸室内管弦楽団
シューベルト／マーラー編：死と乙女
マーラー：交響曲 第5番 より アダージェット
 ●ソニークラシカル SRCR9502
 シューベルト（マーラー編曲）：〈死と乙女〉（弦楽合奏版）
 マーラー：交響曲 第5番 より 第4楽章 アダージェット [ハーブ／吉野直子]



ラヴェル マ・メール・ロワ（全曲版）
小澤征爾&水戸室内管弦楽団
 ●フィリップス PHCP1500
 ビゼー：交響曲 八長調 ラヴェル：〈亡き王女のためのパヴァーヌ〉
 ラヴェル：バレエ〈マ・メール・ロワ〉（全曲版）
 指揮／小澤征爾



水戸室内管弦楽団
ショスタコーヴィチ：アイネ・クライネ・シンフォニー／室内交響曲 他
 ●ソニークラシカル SRCR1675
 ショスタコーヴィチ（バルシャイ編曲）
 〈アイネ・クライネ・シンフォニー〉八長調 作品49a（弦楽四重奏曲 第1番）
 一吉田秀和先生と水戸室内管弦楽団に捧ぐー（世界初録音）
 室内交響曲 八短調 作品110a（弦楽四重奏曲 第8番）
 弦と木管のための交響曲 八長調 作品73a（弦楽四重奏曲 第3番）
 指揮／ルドルフ・バルシャイ



クーブランの墓 ブルチネルラ組曲
小澤征爾&水戸室内管弦楽団
 ●フィリップス PHCP11017
 ラヴェル：組曲〈クーブランの墓〉
 ストラヴィンスキー：バレエ〈ブルチネルラ〉組曲（1949年改訂版）
 ストラヴィンスキー：協奏曲 二調
 指揮／小澤征爾



水戸室内管弦楽団
リヒャルト・シュトラウス：オーボエ協奏曲 二長調 他
 ●ソニークラシカル SICC319
 モーツァルト：フルート協奏曲 第1番 ト長調K.313（285c）[フルート／工藤重典]
 モーツァルト：ファゴット協奏曲 変ロ長調K.191（186e）[ファゴット／ダーグ・イェンセン]
 R.シュトラウス：オーボエ協奏曲 二長調 [オーボエ／宮本文昭]
 指揮／小澤征爾



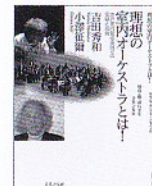
小澤征爾&水戸室内管弦楽団 モーツァルト・シリーズ 1
モーツァルト：交響曲 第40番&協奏交響曲K.Anh.9（297B）（レヴィン復元版）
 ●ソニークラシカル SICC10046
 モーツァルト：交響曲 第40番 ト短調K.550
 モーツァルト：協奏交響曲 変ホ長調K.Anh.9（297B）（レヴィン復元版）
 [フルート／工藤重典 オーボエ／宮本文昭 ファゴット／ダーグ・イェンセン ホルン／ラデク・バボラーク]
 指揮／小澤征爾



小澤征爾&水戸室内管弦楽団 モーツァルトシリーズ 2
モーツァルト：交響曲第36番〈リンツ〉&第38番〈プラハ〉他
 ●ソニークラシカル SICC10047
 モーツァルト：
 交響曲 第36番 八長調 K.425〈リンツ〉
 交響曲 第38番 二長調 K.504〈プラハ〉
 モテット〈踊れ、喜べ、幸いなる魂よ〉K.165 [ソプラノ／森 麻季]
 指揮：小澤征爾



MCO'98
 ヨーロッパ・ツアー・ドキュメンタリー
**『小澤征爾＝水戸室内管弦楽団／
 奇跡のオーケストラ ヨーロッパに行く』**
 音楽之友社 刊
 定価 ¥2,000+税



MCO12年の歩みを振り返る
**『吉田秀和・小澤征爾 理想の室内
 オーケストラとは！』**
 一水戸室内管弦楽団での実験と成就一
 構成・編 諸石幸生
 音楽之友社 刊
 定価 ¥1,800+税



MCOメンバーの横顔に触れる
『水戸室内管弦楽団 WHO'S WHO』
 財団法人 水戸市芸術振興財団 刊
 定価 ¥1,000（税込み）



●MCOオリジナルTシャツ&トレーナー発売中！

Tシャツ1,200円／トレーナー2,200円（友の会会員の方には割引があります。）
 水戸芸術館ミュージアムショップ「コントルポアン」で好評発売中！